

観察ノート

～子どもたちが観察・発見・感動することがたいせつ～

●まずは簡単な記録から

植物を栽培することによって、いままでなにげなく見ていた環境や自然への興味・関心は深まっていく。とくに野菜栽培の最終目的は食べるという楽しみにある。自分でまいた種が発芽したときは大人でも感動するくらいだから、子どもにとってはたいへん大きな驚きを感じる。

また、葉が増え、茎が伸び、花が咲き、実がつくという植物のあたりまえの営みも、子どもにとっては発見の連続になる。そのような体験のなかで作り上げた生産物を食べることによって、子どもたちのなかにその楽しみだけでなく、食べ物にたいする慈しみも芽生えてくる。このような感動を、ただ体験だけで終わらせるのではなく、より高めていくためには観察することが必要になる。

観察するということは、ただ漠然と眺めているのではなく、その野菜が生えている環境を含めて、対象物をいろいろな方

向から見ていくこと。たとえば環境条件ひとつをとっても次のような要素が考えられる。

気象、日照時間、日射の強さ、風、気温、雨量、地温、土質、土の通気性・透水性、地下水位の高さ、排水、土のpHなど、挙げれば切りがないほどある。

低学年では、天気と気温くらいしか記録できないかもしれないが、観察を重ねていくにしたがって、少しずつ項目を増やし高めていけばよい。初めは、次のような簡単なノート(表1)を使い、観察記録欄はできるだけ大きくとって、たくさん書ける子どもに対応できるようにする。



●細かなスケッチが新たな発見につながる

時間が許せば、この表のほかに、ノート1ページほどを使ってスケッチをするとよい。スケッチは、子どもたちがどれだけくわしく観察しているかを指導者が判断するためのものでもある。絵を描くことによって、いままで漠然と見ていた植物を細かく観察するようになり、新たな発見につながる。「カボチャには雌花と雄花があります」と言われて覚えたつもりでも、時がたつと忘れてしまいがちになるが、いちどじっくり観察しながら描くと、画像として記憶に残る。そのためにも、スケッチはできるだけ時間をかけて詳細に描くように指導する。

スケッチノートは大きめのマスや罫線のないものがよい。できれば大きさは実物大に描いたほうがよいが、ノートに収まらない場合は実際の大きさを脇にメモしておく。高学年なら1/2や1/3と縮尺を添えておけばよい。

観察が細かく、そして早くできるようになったら、スケッ

チするスペースと観察記録を一体化したノート(表2)を作るとよい。

観察記録は文章でもよいが、スケッチに直接書き込めば、あとで見てもわかりやすくなる。観察ノートを展示することも考えて、画用紙ほどの厚さのものをカードにして各自がファイルしておくとうよい。厚紙の使用が予算上無理なときはざら紙(わら半紙)でもよいが、はと目部分がちぎれやすく紛失してしまう子どもも出てくる。用紙はA4半分でも足りるが、たくさん描く子どもは1枚では足りなくなる。

興味のある子どもは放課後や昼休みにも観察しはじめる。そんな子どものために、用紙は多めに準備しておくとうよい。



